

投 野 由紀夫

0. はじめに

辞書学 (lexicography) という分野は、まだ我が国では1つの研究分野として確立しているとは言い難い。それは辞書製作については玄人の職人芸的な観がまだ色濃く残っているからである。

辞書作りに携わる人々は、それなりに研究分野（例えば、音声学、文法、語源など）をもち、その研究の応用として辞書を作る仕事をやる。日本の英語辞書は、英米の辞書の引き写しから始まり、大正期の何人かの辞書作りの達人（齊藤秀三郎、井上十吉など）の創意を経て、昭和期には徐々に日本人学習者を意識した辞書作りを行ってきた。しかし、基本的には、辞書は個々の産物によって判断するしかなく、編集上の種々の理念や情報、執筆上の規範などは、それの編集、執筆陣の手中にあるままであった。

しかし、1980年代に入ると、欧米を中心に辞書の科学的、組織的研究がなされるようになってきた。それは、日本と同様に従来の辞書学が理論 (theory) と実際 (practice) が混乱しており、academic subjectとしての体をなしていなかったことへの反省であり、また、情報を lexicographer 個人が独占していることへの反省でもあった。また、本論では、最新の辞書学の動向を英語辞書中心に概観し、その中で特に注目を集めている user study について、その具体的な問題に触れ、今後の英語辞書学を展望してみたい。

1. Metalexicography

欧米の辞書学会では、lexicographyを研究する分野のことを metalexicography と呼んで区別している (Wiegand 1984; Haussmann 1986)。現在の種々の辞書関係の研

究は、このmetalexicographyの一分野におさまることになる。まず、このmetalexicographyについて、Wiegand (1984) を参考に解説してみよう。

Wiegandは、lexicographyをmetalexicographyの一部として見なしており、lexicographyは科学ではなく、scientific practiceだとしている (ibid. p.13)。これは科学が理論の体系化を目標にするのに対して、lexicographyはreference worksを作り出すことが目標だからである。この意味では、科学たり得ないわけである。しかし、このlexicographyという言葉を、Wiegandのように、dictionary-makingと解していない学者もあり、包括的にlexicographyすなわちmetalexicographyと考える人もいる。

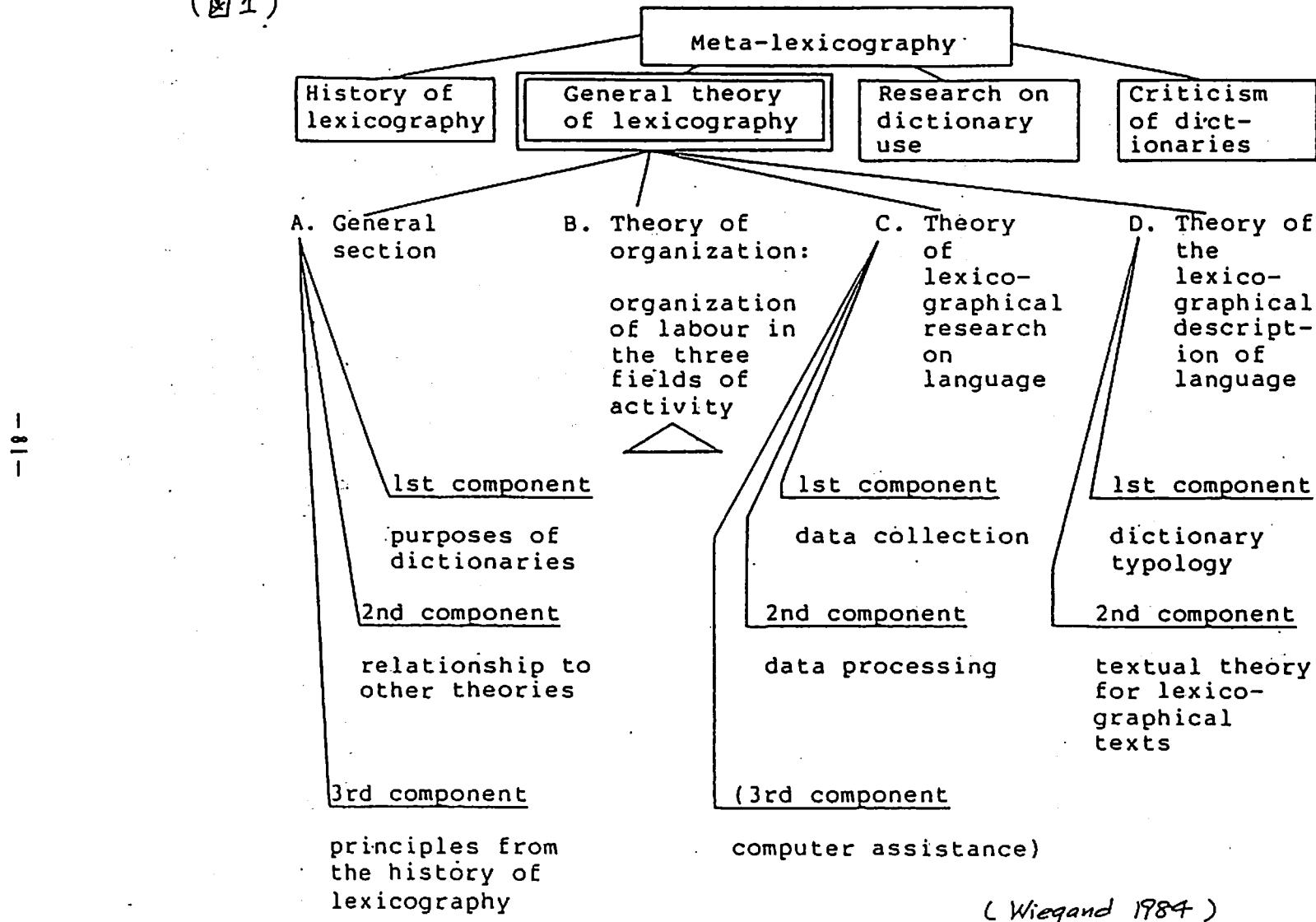
以下に、Wiegand (1984) のmetalexicographyのモデルを示す。(図1参照) これによると、大別してmetalexicographyの分野は、四つの部門に分かれる。

- (1) 辞書編集史 (History of Lexicography)
- (2) 辞書編集の一般理論 (General Theory of Lexicography)
- (3) 辞書使用に関するリサーチ (Research on Dictionary Use)
- (4) 辞書批判 (Criticism of Dictionaries)

(1)は辞書史の分野で、これらは從来から研究がなされていた。(2)がWiegandの言う、lexicographyを扱う理論の分野で、彼はこの(2)の各点について、今後十分な理論化が必要としている。(3)は、辞書を使う側の研究で、これは今までほとんどなされていなかったが、ここ数年間さまざまな角度から注目を集めている。(4)は辞書批判の分野で、既製の辞書を比較研究したりして、そこから今後の辞書作りに役立てるというもの。岩崎研究会の一連の辞書比較分析 (岩崎研究会1981) は、この分野に入るし、海外では、P. GoveのWebsterを中心に、華々しい批評合戦が繰り広げられたのは有名である (Sledd & Ebbil 1962参照)。

Hausmann (1986) は、このWiegandのモデルに加えて、research on dictionary status and marketingを挙げており、その国での辞書の社会的位置付け、及び、辞書のマーケッティングについての研究も重要であるとしている。

(図1)



. 辞書学各分野の主要文献

. 0 辞書学全体の概説は、この分野が現在新しい進展の中でどんどん形を変えているので、およそまとめられないというのが偽らざるところであろう。本論では、近の辞書学の発展の中で特にその特徴となっている辞書使用についての研究に関して詳述していこうと思うが、その前に各分野の主要文献の概略を整理しておこう。

. 1 辞書編集史 (History of lexicography)

この分野は、辞書研究としては古くから行われており、主要な著作だけでも相当数にのぼる。年代順に示すと：

- J.A.H. Murray (1900) : 英国の辞書史
W.M. Mathews (1933) : 英国の辞書小史と理論
E.W. Burkett (1936, 1976) : 米国の辞書史 (W. Websterまで)
Starnes & Noyes (1946) : 英国系の辞書史 (Johnsonまで)
J.H. Friend (1967) : 米国系の辞書史 (W. Websterまで)
T. Hayashi (1978) : 英国系の辞書史 (Johnsonまで)
N.E. Osselton (1983) : 英語辞書の略歴
A.W. Read (1986) : 英語辞書の略歴

以上は英語辞書史全体を扱ったものだが、この他に、Sledd & Kolb (1955) のように、Johnsonの辞書のみについて、あるいは、Sledd & Babbitt (1968) のように、Websterの2版と3版のみを扱うというように個別辞書を扱っているものもある。我が国では体系的な英和・和英の辞書史はないが、「大修館英語学事典」(1983)は、戦後の英語辞書史がまとめられており、特筆すべきものがある。最近の学会で発表されているもので、興味深いのは、Delbridge (1983) で、これは各国（北米、南アフリカ、オーストラリア）の英語辞典についてその発達の経を論じている。イギリス、アメリカ双方の辞書がどのように他の地域に影響を及したかがわかるし、このような英語辞書史の記述は今後面白い視点であると言え

よう。

歴史的視点でOEDを中心とした未来の辞書について展望しているのが、Bailey (1986) である。New OEDのプロジェクトについての経過、今後の辞書製作の展望と、氏の長い辞書編さんの経験に基いた視野は示唆に富むものが多い。

なお、特に辞書史に関する学会が1986年3月に英国のExeterで開催され、そこで発表された論文がまとめられた、Hartmann (1986b) は、辞書史の分野の最新情報を知りたい人には必読の書であることを記しておく。

辞書を他のreference booksと共に、その時代の歴史的、文化的観点からとらえた異色の研究は、McArthur (1986) である。これは単に辞書史というにとどまらず、人類の「記録すること」の歴史とでも言えるような独特的の視点で、太古から未来を眺望している。

2. 2 辞書編集的一般理論 (General theory of lexicography)

Wiegand (1984) の分類に従って、各分野の諸研究の主要なものを挙げるにとどめる。

2. 2. 1 辞書の目的論 (Purpose of dictionaries)

辞書の目的論は、全体を一望するような論文は皆無で、それ④れのタイプ別の辞書の目的を論ずるといったタイプのものがほとんどである。Dictionary typology で重要な論考をまとめているAl-Kasimiは、interlingual/translation dictionariesについての目的論、及び理想的モデルを論じている (Al-Kasimi 1983)。彼の分類によれば、辞書のその目的別に次の三つに分類できる。

- a) 機械翻訳のための辞書
- b) 専門用語のデータバンク用の辞書
- c) 人が引くための辞書

従来の分類の枠を越えた思いきった分類であるが、現代のテクノロジーの発達を考えすれば当然必要であると言えよう。彼はまた、(C)についても、その辞書がL1 speakerのためかL2 speakerのためか、comprehensionのためか、productionのためかによって、interlingual dictionariesの分類を試み、かつ、それぞれに必要な条件（訳語、語義分類の諸問題の解決など）を論じている。

その他、Moulin (1983) は、LSP dictionariesについて、また、Cowie (1984) は、EFL dictionariesの現状と今後の課題について論じている。特に二ヶ国語学習辞典の具体的な問題については、Tomaszczyk (1981) に詳しい。

新しいところでは、Herbst (1987) が興味深い。彼は普通の英語辞書以外の言わゆる特殊辞典(valency dictionaries)について、一般の英語辞書と比較して、その長所・短所、改良点などを論じている。日本でも特殊辞典の編集は盛んなので、この論文は多くの示唆を与えてくれるだろう。Herbst は特にこの中で、一般的の辞書では扱いにくい点(grammatical codeなどの理解しやすさ;明瞭さ(explicitness);包括性(comprehensiveness))に関して、これらをカバーするための特殊辞典の必要性をvalency theoryとしてまとめている。

2. 2. 2 辞書編集作業の組織に関する理論 (Theory for the organization of lexicographic work)

この分野の論文は少ないが、どのように一冊の辞書が産み出されるかについて、プロジェクトの planning から implementation まで、実際のプロジェクトの例をもとに書かれた稀少な論考が、McGregor (1986) である。彼はLDOCEの project managerをしていた人で、その編集行程の具体例は、日本の出版社にも興味あるところであろう。

米国の事情は、古くはBarnhart (1962)、新しいところでは、Gates (1986) が参考になる。Hartmann (1986) も同じテーマで英国の辞書編集の実情を紹介しているが、最近の特徴として、professional lexicographer の養成プログラムが真剣に検討され始めていることがあげられる。Gatesは、現在では世界でも唯一と言える、full-timeのlexicographer養成コースのある、Indiana State Universityで

のカリキュラムを紹介しながら、lexicographer に必要な資質、そして編集に不可欠な要素を論じている（その他、フランスの事情は Rey (1986) 、ドイツの事情は Haus-mann (1986) 参照）。

2. 2. 3 データの収集・加工についての理論 (Theory of gathering and processing data)

この分野では、computer 利用の論文が非常に多いが、大別すると、(1)辞書編集におけるコンピューター利用の可能性を論じたもの、(2)具体的なコンピュータ利用のレポート (e.g. data base 作製、corpus 分析のソフト作成、etc)、そして(3)各國でのコンピュータ利用の現状、実例、ということになろう。(1)に関しては、Knowles (1983, 1984) が重要。(2)では、Engel & Madsen (1984) のdata base作製レポート、Lyne (1984) が辞書編集のためのcorpusが十分一般的な分布をしているか否かを検査するシステムを検討、紹介しているものが代表例。(3)の例としては、中国のコンピューターを駆使した辞書編集の報告がMatthias (1984) に、ドイツの例がTeubert (1984) にある。

コンピューターに限らず、一般的なデータ収集および加工に関する論文がいくつあるが、特に、Sinclair (1986) の辞書編集上の証拠 (evidence) という考え方には面白い。彼は、辞書を作るときには、(1)他の辞書、(2)内省 (introspection)、(3)言語使用の観察 (特にtextについて)、の3つが大別して利用できるとしている。特に3番目の、実際の使用例を見る点について、そこで問題点、特に収集した用例などの観察のしかたなどについて論じている。

一方、Béjoint (1983) は、辞書編集上のfield-workの重要性について論じている。彼は field dictionaries という語を用いて（これはもともとWolfart (1979) が初めて用いた語）、他の辞書との違いをまとめているが、field-workの二つの基本的なテクニック、すなわちobservation (観察) とelicitation (誘引) が、辞書中のどのタイプの情報に対して有効であるか論じている点は、大いに参考になる。特に1) corpus に記録されていないような語、2) 語の用法がcorpusによって十分明らかにされない場合、3) ある語法についての本国人の態度 (attitude) を記

の
録しようとする時の field-work の必要性、またその欠陥を指摘している。
↑

2. 2. 4 辞書分類学 (Dictionary typology)

この分類では、Al-Kasimi (1977) の分類が先行文献を十分に検討した上で、かつ、自らの発案を示した重要なものである。先行文献中特筆すべきは、Malkiel (1959) であるが、彼は、(1)範囲 (range) 、(2)見方 (perspective) 、(3)提示 (presentation) の3つを、さらに細分し、それを弁別素性を用いた分類を行った。Al-Kasimiは、この分類に対し、より純粹に言語学（彼の基礎はA.A.Hillから受けついだ構造主義である）の見地から、また、既存の分類にとらわれない分類を行っている。

その他は各分類間の相違などを取り上げたものが中心となるが、Kirkpatrick (1985) は、本国人のための辞書と、外国人向けの辞書との相違を、発音・定義・スペース・defining vocabulary (定義のために用いる制限語) ・語法などについて分析し、両者に必要な諸条件を整理している。また、Atkins (1985) は、外国人学習者向けの辞書のうち、特に一ヶ国語辞典と二ヶ国語辞典との相違について論じている。この分類は、辞書というものをどのような尺度で切るかという点で、目的論、userのニーズ分析、社会における辞書の役割など、言わゆる“辞書の社会学 (sociology of dictionary)” とでも言うべき要素を含んでおり、今後も各分野の研究の成果と共に、より分析の望まれるところとなろう。

2. 2. 5 テキスト理論 (Textual theory)

この分野は言わゆる辞書の情報をどう記述するか、提示するか、ということに関する理論を扱う。それぞれ次の各分野に関して論じているものが多い。

- (a) 発音
- (b) 文法
- (c) 定義

(d) 用例

(e) イディオム

全体を扱ったテキスト理論の草分けは、*Zgusta (1971)* であろう。彼は意味論的背景から、辞書記述の際の諸問題に関して、彼なりの指針を示そうと試みており、それがタイトルの “Manual” という言葉にも表われている。中心は上述の (b) ~ (e) であり、欧印語に精通した彼ならではの分析と、lexicographerの慣例を知ることができる。

発音の分野では、岩崎研究会の辞書の比較分析（岩崎研究会 1981）に質の高い分析が見られる。*Wells (1985)* は、同様に LDOCE、EPD、GID の発音表記の比較分析と、特に variant (次の語頭の音に影響されて生じる語尾の [r] ; 成節子音；強勢移行 (*stress shifting*); 弱形) の取り扱いについて論じている。海外の最近の論文では、あまり発音のみが単独で扱われることがないのは、発音記号があれば便利という程度で、L2 learner のニーズがむしろ、語義や collocation などにあるから、と言えそうである。

文法に関しては、さまざまなトピックスが扱われている。古くは *Gleason (1967)* が、また、*Hornby (1954)* の動詞型の分類は、学習辞典のための文法情報の先駆的業績である。岩崎研究会 (1981) の学習辞書 (OALD, LDOCE) の分析における文法欄の研究も、国内のものだが、レベルの高い研究だ。もう少し大まかなものになるが、*Jackson (1985)* は、学習辞典中の文法情報（特に屈折、品詞、統語構造）について、その L2 learner への有効性を論じている。*Lemmens & Wekker (1986)* は、最近論議を巻き起こしている学習辞典における grammatical coding (文法情報を記号で表記すること) について論じた本格的著作。OALD, LDOCE, ODCIE, LDOPV などの L2 learner 用の辞書中で用いられている文法記号について検討し、修正案として、より一貫性があり、現場主義 (*self-explanatory* と言っている) に立った使いやすい code 体系を提唱している。

(c) の定義に関しては、大別すると、語義区分に関するもの (Kipfer 1984)；語義の記述方法に関するもの (Ayto 1983; Geeraerts 1987; Ilson 1987)；学習辞典における defining vocabulary に関するもの (Neubauer 1984; 1987)；そして、

二ヶ国語辞典における訳語の問題 (Zgusta 1984) がある。

(d) 用例についてはまとめた研究は少ないが、Kherme (1984) が英ーアラビア語辞典を例に取り、contextualizationの諸問題を論じている。最近の学習辞典は、full sentenceで用例をあげるのが常識となってきたが、これなどについても、具体的な効果を論じたものがあるべきではないかと思うが、そういう論文は現在ない。

(e) のイディオムやコロケーションを扱った論文は比較的多い。ODCIE (1983) の編者であるCowieの一連の論文 (1978, 1981, 1983) は、一般の学習辞典では扱いきれないイディオムやコロケーションの記述について、理論的に、かつ、学習者のニーズやスキルにどのように応じていくかを検討している。ODCIEの序文も、イディオム、コロケーションに関して非常に良い示唆を与えてくれるものである。最近、BBI *Combinatory Dictionary of English* (1987) のタイトルで出版したBensonの、この辞書を作製するにあたっての研究成果をまとめたいくつかの論文 (Benson 1985, 1986) 及び、同じ編者群による著者 (1987) は、我が国の勝俣栓吉郎の「英和活用大辞典」の発想をより精密化したものとして、L2 learnerには有用な辞典の論理的背景をまとめたものである。

2. 3 以上、最近のmetalexicographyの諸分野の主要研究を整理してみたが、最後にこれらの論文のほとんどが生まれてきた背景である二つの辞書学会について言及しておこう。1つは、北米中心のDictionary Society of North America (DSNA) である。1975年に創設され、1979年から *Dictionaries* というjournalを刊行している。北米中心なので、*Middle English Dictionary* (1956—)、*Dictionary of American Regional English* (1985—) などに関する報告や、コンピューター利用の可能性などを探るものが多い。特に活発な活動を行っている人として、Richard W. Bailey、Thomas A. Knott (MEDの編者)、Frederic G. Cassidy (DAREの編者)、Edward Gates (前述の辞書編集者コースを持つIndiana State Univ.教授)、そして Ladislav Zgustaを挙げておく。

日本の学習辞典にたずさわる人にとっては、DSNAよりもヨーロッパ中心の、European Association for Lexicography (EURALEX) の方が有益な情報を得られよう。

1983年に、初の辞書学会議 LEXeter '83が英国 University of Exeter で開かれてから、毎年 International Annual for Lexicographyをヨーロッパ各地で持っており、Longman, Oxford, Collins, Chamber'sといった出版社と tie-upした活発な辞書製作、データベースの作製、情報交換を行っている。発起人ともいえる、Reinhard R. K. Hartmann (Exeter大学、Dictionary Research Centre長)、Robert Ilson (The Survey of English Usageの中心メンバー)、Anthony P. Cowie、など、学習辞典やUser研究に携わっている人々が主要メンバーで活躍している。EURALEXからは紀要は発行されていないが、毎年のConferenceの論文を集めて、Max Niemeyer Verlagが出版している。なお同出版社は、LEXICOGRAPHICA Series Majorと題して、辞書学で有益と思える論文や研究を刊行している。

以上、現在の辞書学の主要な動きを見てきたが、特に現在注目を集めている user studyについて、以下で少し詳しく見てみることにしよう。

3. The User Studyの動向

3. 0 The user studyとは？

辞書は使用者を念頭に置いて作るのであるから、the user studyなどと今さら言うのはなぜかと思う読者もおられると思うので、まず最初にその経緯を見てみたい。

辞書製作者の意識には、当該言語をどれだけ正確に記述するかという問題と、使用者にどのようにそれを提供するか、という二つの問題が絶えずあるはずである。しかし、それ以外に、予算・紙数・製作年限・スタッフ、といった要因が複雑にからみあい、上記二点の目的が完全に実現できないことが多い。幸いにして、全ての他の犠牲を覚悟で、前記の一番目の問題に可能な限りの最良の答えを出そうとしたのが、Oxford English Dictionary (OED) であった。

従来のOED以降の英米の辞書は、主として本国人向けのものだったので、辞書は主として lexicographer の創意工夫にまかされ、作る側が与えるものを使用者は受けているという関係であった。1960年、Indiana University で持たれた学会で HouseholderとSaportaは “dictionaries should be designed with a special set

of users in mind and for their specific needs" (Householder and Spirova 1982, p.279) と述べており、ここに現在の動向の初芽とも言えるものが見られる。当然と思われていた userに対する作る側の再認識が求められたのである。

これより既に日本では、現在の L2 lexicography と言われる分野の先駆となった、Harold E. Palmer、そして、A. S. Hornby が完全させた *Idiomatic and Syntactic English Dictionaries* (1942) が世に問われており、外国語学習者向けの英語辞書の編集は必然的に lexicographer の目を user に向けていくことになるのである。

その後、*Oxford Advanced Learner's Dictionary of Current English* (OALD)、*Longman Dictionary of Contemporary English* (LDOLB)、*Chamber's Universal Learner's Dictionary* (CULD)、そしてごく最近の、*Collin's COBUILD English Language Dictionary* (COBUILD) などが続々と登場し、EFL learners 向けの辞書は全盛期を向かえるに至った。外国人学習者のニーズや、彼らにわかりやすい情報提供の仕方が、lexicographer によって工夫されるようになっていったのである。

しかし、1980年代に入って user に対する情報提供のあり方に関して疑問が投げかけられるようになってきた。それは、次の D. Crystal の言葉に凝縮されている。

"The notion 'convenience of the user' is often cited, but rarely if ever tested. Systematic information on this point would be quite absorbing."

——— D. Crystal (1986, p.77)

一連の L2 learner 向の辞書の出版は、さまざまな、言わゆる新機軸を持たらした。例えば、古くは ISED の U、C の区別、新しくは COBUILD で試みられた新しい定義の方法などである。しかし、lexicographer の提供する情報は日を追って複雑多岐にわたるようになるにもかかわらず、肝心の user が果してそれをどの程度使えるのか、また、使う必要があるのか、に関しては、何の調査も行われないできた。ここ数年、ようやく lexicographer の間に、辞書と user の間に相当のギャップがあるのではないかという問題が投げかけられるようになり、(Cowie 1983, p. 136)、実際に user の利用状況やニーズの分析をする必要があるという見解が広く持たれるよ

うになった。(Béjoint 1981; Tomaszewski 1979; Tono 1986; Hartmann 1987b)。The user studyというのは、そのようなuserに関する経験的(empirical)なデータを集めていく分野のことを特に指しており、D. Crystalが言う‘experimental lexicography’(D. Crystal 1986, p.78)という考え方方に特にそれを押し進めた実験中心のリサーチの必要性を訴えている。

3. 1 辞書使用の諸要因

Hartmann (1987b)によると、The user studyには次の四つの観点が考えられる。

- (a) 辞書中の情報カテゴリーに関するリサーチ(‘dictionary typology’)
- (b) 特定のuser groupに関するリサーチ(‘user typology’)
- (c) 辞書使用の背景に関するリサーチ(‘needs typology’)
- (d) 辞書引きのストラテジーに関するリサーチ(‘skills typology’)

以下、彼の分類を参考にして、各分野の研究の現状と問題点を指摘してみる。

3. 2 Dictionary Typology

この分野は、簡単に言うと、“What's in a dictionary?”という質問で言い換えられる。辞書のuserを意識すると、結局、どのようなuserにはどのような情報が必要か?という視点が不可欠となる。それが辞書の分類に通じてくるわけである。この分野の主要研究は、大別すると次の3つである。

- (1) 辞書に必要な情報をuser自身に問い合わせ、現状を分析する。
- (2) あるtaskに辞書がどの程度役立つかテストすることで、辞書に欠けている情報を調べる。
- (3) 辞書を作った側、使う側、双方の意見を発行物(前者なら使用の手引きやワークブック、後者なら批評やconsumer guideなど)を通して調べる。

(1)に関しては、パイオニア的な論文としてBarnhart (1962) がある。彼は、辞書が売れるか否かは、それが利用者の疑問をどれだけ解決してくれるのかにかかっているとして、1955年に、108のアンケートを大学の作文担当の教官に配布し、次の6つの情報のうち、どれが最も新入生を念頭に置いた時に必要かを答えてもらった。それは、(a) 発音、(b) スペリング、(c) 意味、(d) 語法、(e) 同義語、(f) 語源であったが、結果は、(c) - (b) - (a) - (e) - (d) - (f) の順で重要という結果が出た。

彼の論文では、アンケート項目などについて資料が明らかにされていないところがあるので、研究としては未発達の感はぬぐえないが、辞書製作において初めて、データをとるということをした試みは評価されよう。Barnhartは、実際の大学1年生を使ったのではなく、教師に意見を求めているが、これは可能ならば、両者の意見を調査し、比較してみると面白かったのではないか。また、今後の可能性として、あるuser (例えば大学一年生) を対象とした時の必要な情報は何か、に関して作る側 (lexicographer) と、使う側との意識の違いを調べてみると案外面白い結果ができるのではないかと思われる。

(2)に関する先行研究としては、Bušić (1975) がある。彼は、中型の一般向きの (学習辞典ではない) English-Croatian dictionaryを用いて、どの程度、英米の時事を扱った雑誌 (TIMEやThe Observerなど) を読めるかをテストした。調査期間は2年半で、18人の学生に9つの雑誌・定期刊行物のうちの34冊を読んでみてもらい、辞書の効果と、(a) 抜けている見出し語はないか、(b) 抜けている意味はないか、(c) 定義の訳が誤っているものはないか、で見てもらった。結果は記録した6,272項目のうち、78.3%は次の改訂で加えられるべきものだった。

この種の研究は、組織的にやっているものは少ないが、日常の辞書批評などにはよく載っている。どのような辞書も掲載できなかった語いや語義などがあろうが、Bušićの研究は78.3%のうち、どのような項目が加えられるべきものとして取り上げられたのか、辞書製作側のそれに関する対応や意見はどうか、などを明らかにしておくともっと面白かったのではないかと思われる。単なるアラ探し的なものにならずに、製作者の意図、利用者のニーズ、そして実際の利用価値を組織的に分析できれば、その辞書に効果的なfeedbackを与えることができるであろう。

(3)は、間接的な研究方法になってしまふが、明確な枠組みを決めてやれば面白い。作る側の辞書の中身はこうあるべき、という考え方には、資料としては辞書の手引きや、最近別冊になっていることの多いワークブックなどを参考にできる。逆に、利用者側の意識を、書評や辞書ガイドなどから伺い知ることができる。Websterの3版を中心とした、この手の研究が、Sledd and Ebbitt (1962) にある。こういう研究は、日本の英語教育においても、教授法評価などを論ずる際、普通に扱われており、もっと辞書学の分野でも行われてよいと思われる。辞書学の最近の論文では、この3つのタイプが主な研究方法であるが、教育心理学研究などの方法を利用して、他のリサーチ方法も考えられる。例えば、項目分析 (factor analysis) の手法を応用して、辞書中の情報を、ある user 群を対象とした時、重みづけをしてみるとはどうであろうか？先の Barnhart の研究にあった、意味、発音、スペリング、語法、同義語、語源が、ただこの順で重要というデータだけでなく、意味がスペリングに対してどの程度重要度が高いかを示せれば、切り捨てるべき情報などについての議論も説得があるのではないだろうか。

また、より実験的なデザインを用いることも今後必要になってくる。投野 (1984) は、辞書中の6つの情報（文法情報、文型、UC表示、連結 (collocation) 、イディオム、定義の補足説明 (gloss) ）のそれぞれを1つづつ欠いた辞書を作り、かつ、例文の有無と定義の順序という計8つの要素をコントロールして、8つの異なる辞書を被験者に実際に引かせて、どのような情報がないと語や文の理解に支障が出るかを統計的に測った。結果は、例文は想っていたほど利用されておらず、一番目に出でてくる定義に引かれて意味を選択するというケースが多いことが実証され、the user study の分野でも controlled experiment が有効であることを示すことができた。

3. 3. User typology

これは “Who needs dictionaries?” という問い合わせる領域であるが、この研究もまだ始まったばかりである。ごく最近まで、lexicographer は、ある特定の user のみを念頭に置いてきた。すなわち、自分と同じ位質く、文学的素養があ

り、言語学的、教育的素地を持っている人 (Dubois 1981, p.236) であった。しかし、実際は辞書の情報提供の仕方はuserのタイプによって異なる、という、ごく当たり前のことが最近まで真剣に議論されてこなかったのである。

確かに「学習辞典」、「中学生向き」、「高校生向き」、「一般、大学生向き」などと、作る側でその狙う利用者層を決めて、内容を作ることは簡単であるが、問題はuser側がどの辞書を使っているか、言い換えると、上記のような意図で作られた辞書が実際はどのようなuserを獲得しており、また彼らの使用目的は何か、に関する組織的な研究は皆無なのである。出版社は、読者アンケートのような形でそのような情報を握っているはずだが、Hartmann (1987b: 20) の言うように、それらが公開されることがないのは遺憾だ。

筆者の知る限り、日本で行われているこの手の調査で公開されているのは、筑摩書房の「言語生活」(1981年4月号)に掲載された利用状況のアンケートだけではなかろうか。文教大学情報学部59名(文科系)と中央大学理工学部55名(理科系)そして、統計数理研究所の研究員30名、計144名を対象にした調査である。国語辞典と英語辞典に分けて調査されているが、英和辞典についてはいくつか面白い点がある。英和辞典を、「読むとき」と「書くとき」のそれぞれ、どの程度利用するかについて、学生は「いつも使う」としている人が両方とも60%近くあるのに対し、研究員は「書くとき」「いつも使う」が58.6%なのに対し、「読むとき」に「いつも使う」人は31%と少い。これは端的に、利用者の層の違いが利用状況に出てきている好例である。その他、使い方、所有数などについてもデータがあげられているが、これもuserの分類や使用内容の把握に興味深い資料を提供してくれる。

出版者は、この際、自社に保存してあるデータをより良い辞書作製のために、学会等で発表するべきではないだろうか。欧米では既に、出版社のlexicographerやproject managerが積極的に学会で発表しており、情報交換の場は広く開かれている。日本は、有数の学習辞典王国なのだから、もっと世界にインパクトを与えるデータを示せるはずである。

3. 4. Needs typology

辞書使用者のニーズを分析するこの分野の先駆けは、Quirk (1973) である。彼は、ロンドン大学の学生（学部生220名、文系理系、男女それぞれ半分ずつ）に、30の質問肢を与えた。辞書の保有数、使用目的と頻度、情報が見つからなかった経験、改善点などに関するアンケートである。これらが直接彼らのニーズを反映しているか否かは疑義があるかもしれないが、直接userの意見、態度、批判などを調査分析している点は大変興味深い。220名中、192名が辞書を所有しており、156名は月に1度は使っているという結果や、意味を知る、という目的が大半を占め、語源や発音は軽視されているという報告など、あるuserグループの状況が鮮明にわかる。この少し後、Wiegand (1977) が、辞書利用の社会学 (Sociology of dictionary use) ということを言い出し、言葉が不明なために生じるコミュニケーションの支障を克服するために辞書作りがある、とし、辞書に要求されていることを適格に知るためにも、あらゆる可能な限りの辞書引きの場面や状況を、経験的に記述していく必要性を訴えた。

Quirkがmonolingual dictionaryに関して調査したのに対して、Tomaszczyk (1979) は、外国语学習者や翻訳家を対象に、bilingual dictionaryにまで視野を拡大して同様な調査をしている。57項目のアンケートに応えたのは、外国人学習者も含む449名であった。この手の研究の欠点にありがちなのは、アンケートを論文に添付していないことである。これは、他の分野の教育研究や心理学研究では考えられないことであるが、辞書学の経験的リサーチでは、このような幼稚なことが依然、平気でまかり通っているので、早くここから脱却する必要がある。ともかく、彼のアンケート結果で興味深いのは、初めて外国语学習者のニーズ分析が行われた、という点であろう。彼のアンケートに応えたのは、米国の大学に学ぶ外国人学生55名、ポーランドの大学に学ぶ外国人学生62名、外国语学科の167名のポーランド人学生、60名の言語教育に携わる教員、25名の純文学の翻訳家、その他80名の翻訳に携わる人達と広範囲にわたっている。サンプルの大きさでは、Tomaszczyk以上の研究は今のところない。彼の結果から指摘されているのは、(1)学習者は初期の段階ほど二ヶ国語辞典に頼る傾向があり、proficiencyが増すにつれて、一ヶ国語辞典に移

(3)

行していく、(2)大部分の利用者は、二ヶ国語辞典より一ヶ国語辞典の完成度の方が高いと考えている、(3)ある目的のための特殊辞典が増える方が、一般大衆向けの分厚い辞書を作るより有用である、(4)初級、中級の学習者は辞書の情報について無知であり、指導がより効果的になされる必要がある、などであるが、(4)の視点などは最近クローズ・アップされてきており、Herbst (1987) のValency theoryは、前述した通り、この代表例だ。また、(2)などは日本の英語学習者が答えたとすればかなり違った印象になったのではないか。日本の国語辞書の出来況は他国に比べるとまだまだ勝るものではなく、かえって英和、和英などの二ヶ国語辞典に他国にない斬新なアイデアがある。

Hartmann (1987b: 15) も言っているように、Tomaszczyk (1979) のレポートは、研究報告としては不完全な点が多い。統計は明記されておらず、よって各質問への解答も明確なパーセンティージが示されていないので、報告も説得力がない。Hartmannは次のようにコメントしている。

"More and more the suspicion is gaining ground that indirect surveying of population samples needs to be supplemented or replaced by more carefully controlled direct observation."

(ibid)

Tomaszczykのニーズ分析に触発されて、フランスのリヨン大学のHenri Béjointが、外国入学者のニーズ分析を行っている (Béjoint 1981)。サンプルは、かなり少いが、特徴としては全員が英語を外国语として学ぶフランス人学生だということだ。Béjointは特に彼らの英英辞典の使用状況に絞って調査しており、123名（2年生63名、3年生43名、4年生16名）に、21の質問肢を与えて答えさせている。

質問肢の内容は、以下の通りである (Béjoint 1981, pp.214-221) :

1. 英英辞典を持っていますか？
2. どの辞書を持っているか名称を書いて下さい。
3. どうしてその辞書を買ったのですか？
4. いつ買いましたか？
5. 他の英英辞典でどのようなものを知っていますか？

6. 複数の辞書を使えるとしたら、どの英英辞典を使いますか？それはなぜですか？
7. 英英辞典をどのくらいよく使いますか？
8. 辞書で引くのはどのような情報が最も多いですか？（選択例あり）
9. どのような際に辞書を一番よく使いますか？（選択例あり）
10. 特に何かを搜すというのではなく、何となく拾い読みをすることがありますか？
11. 辞書の初めにある使い方または解説をどの位しっかりと読みますか？
12. 付録についている情報を今まで使ったことがありますか？
13. 語の用法を示した記号を今まで利用したことがありますか？
14. 自分の英英辞典に満足していますか？
15. 自分の搜している事柄が見つからなかったという経験がありますか？
16. あなたの辞書になかった単語を記憶していますか？
17. どのような単語を一番よく辞書で引きますか？（選択例あり）
18. 次のものを使いますか？ 1. 用例、引用文 2. 同義語 3. 絵
19. 以下の複合語 (compounds) を、どの見出しで引きますか？
(計10個程の複合語に印をつけさせる)
20. 自分の辞書は詳しすぎるとと思いますか、簡略すぎると思いますか？
21. 自由に書かせる欄

Tomaszczyk (1979) に比べると、質問肢の公開、結果がパーセント表示されていること、など進歩したと言えよう。主な結果として彼が指摘しているのは、(1)大部分の外国语学習者は辞書を使用している、(2)英英辞典、つまり一ヶ国語辞典は二ヶ国語辞典より役に立つ、(3)中級・上級の使用者でさえ、辞書を充分活用できているとは言えず、手引きも読むことはなく、種々の記号も使っていないものが多い、(4)学習者が利用するのは、リーディングなどのdecoding activitiesの場合がほとんどで、英英辞典の豊富なencodingのための情報は、ほとんど使われていない、(5)俗語や専門用語が少ないことが苦情として目立つ、(6)固有名詞は是非必要という人は少なかった、(7)語の頻度、使用する文脈などについての情報はあまり必要という

人がなかった、などであるが、非常に面白い資料を提供してくれている。 例えば、(4)などは日本の英語学習者にもいえることであるが、ここで今後の研究によって是非、*decoding*のために必要な情報と*encoding*のために必要な情報、また両方に必要なものなどが具体的に分類されてくることが望まれる。 それは今後の可能性として、完全に独立した*comprehension*用の辞書と*production*用の辞書というべきものの開発を促すかもしれない。(3)などは、これが単なるアンケートなので実際の使用に関しての客観的データではないが、辞書を作る側にとっては耳の痛い結果となつた。 実際、言わゆる「新機軸」と称して次から次へと盛り込まれる情報の一体どれだけをuserが把握しているのか、また利用するのか、はっきり言って誰も知らないのが現状だ。「便利」という意識が作る側の自己満足に終わっているとしたなら、再考せざるを得ない。

Béjointの研究は視点は大変面白く、有益な情報を与えてくれるが、やはり間接的な調査方法に問題が残る。 今後のニーズ分析は、ますます直接userを観察すること、また実験的手法を用いて、見たい事柄を必ず見れるようなデザインの研究が必要となってくるであろう。

その他のニーズ分析の要約はHartmann (19876: p.20-23) を参照されたい。

3. 5. Skills typology

この分野は、辞書学の分析の中でも最も新しく、また同時に未開拓でもある。今まで見てきたように、辞書作りはlexicographerの予想をもとに内容が決められていたのが、徐々にuserのニーズにより敏感になり、実際の彼らのニーズ分析などもするようになった。しかし、ニーズ分析の研究方法の大半は、アンケートによる意見調査であり、アンケートが持つ限界は最近特に指摘され改善を求めていく (Hatherell 1984)。直接観察 (direct observation) や、相関モデル、さらに、実験モデル、と、リサーチの方法がより精密化される必要がでてきている。

言わゆる辞書使用の認知ストラテジー (cognitive strategies of dictionary use) の解明はどのような役に立つのであろうか？ 第1に、実際にuserの検索の仕方がわかるのであるから、それに対応した情報の提示方法を考えることができる。

例えば、仮にuserが見出しの最初の部分しか見ないという結果が出たとすると、(一方でuserの辞書指導も必要だが)一番重要な項目だけ見出しの最初にリストしておくこともできよう。第2に、辞書引きプロセスの解明は一般userの教化のために重要な資料となる。もしgood dictionary userがどのように辞書を引き、逆にpoor userとの相違などがわかれば、辞書指導などの具体的示唆となろう。どの点で辞書を改善し、どの点でuserを訓練すべきかは難しい点だが、いずれにせよ現在批判の多い、辞書とuserのギャップを埋めることになるのは確かだ。

スキル分析の先駆的論文はMitchell (1983) である。これはScotlandのAberdeen college of Educationで行われたリーディングのプロセス分析の研究の一貫として辞書使用スキルについて調査されたものである。筆者はこの報告書の第1部の方しか入手しておらず、肝心のスキル分析の結果に関しては直接論文にあたれなかつたが、Hartmann (1987a, b) の要約に従ってまとめてみよう。彼女はリーディングのプロセスをいくつかの段階に分けて、その各下位区分のスキルを被験者がどの程度修得しているかを見ようとした。数種のリーディング・テストを課した模様であるが、そのうち1つは、テキストから適切な情報を引き出す際の辞書の使用効果を見るものであった。この、辞書中から最適な関連情報を探し出して、テキスト理解に利用する方策を、彼女は“search-do reading”と呼んでいる。Mitchellは、90名余のスコットランドの学生を使って、あるテキストを読ませて、unitsと称するスキルをテストする問題をさせてみた。(Hartmannの解説を見ても、このtest unitsの内容は明らかでない。) 結果は、語の意味を見つけるというプロセスが、非常に複雑なものであることが明らかになった。適切な見出し語(headword)を見つけること、見出し(entry)の内容構成の理解、適切な定義を捜す、適當な意味を文脈にあてはめる、文脈やテキストにあうように定義を言い換える、と言った1つ1つの段階で生徒はつまずき、それが必要な情報を得ることを難しくさせていることがわかった。Userのスキルに関するデータを引き出すテストを試みたりという点でこのMitchellの論文は価値があるであろう。このような実験やテストの積み重ねで、辞書引きのプロセスの解明がなされていき、Scholfield (1982) が自らの仮説として述べた辞書引き過程のモデルのようなものが検証できるようになる。

Mitchell (1983) は、言わるnativeの辞書引きスキルを観察したが、EFL students

を扱ったものがArd (1982) とBensoussan他 (1984) である。Ardの研究は、英作文（エッセイータイプの作文）における二ヶ国語辞書の使用の利点、欠点を調べることを目的としたもので、辞書を頻繁に用いる日本人女性と、全然使わないアラブ系男性という二人を、実際の作業過程をビデオに撮り、かつインタビューをしてみるという方法で観察を試みた。 それぞれ一名ずつなので結果の一般化はすぐにはできないが、しかし、方法的には興味深く、かつ、二ヶ国語辞典による干渉の例などのデータは参考になる。 今後このようなビデオを用いた実際の検索過程の解明や、userに対して検索過程を意識化するようなインタビューなどをしてみると大いに有効だと思われる。

Bensoussan他 (1984) は、イスラエルの2つの大学において、700名余を対象に調査を行い、辞書使用の読解力への影響を見ようとした。 彼女らによると、上級のEFL learnersにとっては、辞書を引くことは読解力とは特に高い関係がないことがわかった。 実験のデザインはかなりしっかりしたもので、サンプルも大きいので、この結果はかなり信頼度が高いが、9つのテキストに対して行われた設問が、辞書を使わずとも出来るようなものが多い点と辞書使用のスキルを割るためにデザインが少々不明確な点が今後の課題であろう。 ちなみに筆者も、未発表だが、辞書引きスキルと読解力の関係をテストしてみたことがあり（投野1985）、その際、辞書指導を十分に行われた中学1年と2年の被験者に、辞書引きスキル診断テスト（自作）と、リーディング・テストを実施し、相関を取ったのだが、面白いことに、中1の方は、辞書をよく引ける方が、辞書を使ったリーディングに高い正の相関が出るのに対し、中2の方は、辞書をよく引ける方が、辞書を使わないリーディング・テストとの相関が高いという結果がでたのである。 このpilot studyもサンプルが小さいので十分な結果とは言えないが、Bensoussanの結果に対して、辞書使用はリーディングの一般的な能力に正の転移がある、という仮説を裏付けるようなデータを出しておらず、今後の研究が望まれる。

Hartmann (1987b) には、これらの他にHatherall (1984) が掲げてある。 彼は、前述のBejoint (1981) やHartmann (1982) などの、アンケートによるuserの辞書使用調査にデザイン上の欠陥があるとし、“the only reliable method of collecting data on dictionary user behaviour is by direct observation” と断言して

いる (*ibid*, p.184)。彼は英語を外国語として学ぶドイツ人学生にボランティアしてもらい、*Sunday Times* のビジネス欄のかなり高度な英文をドイツ語に訳してもらった。その際、辞書で調べた箇所、求めた情報の有無、情報が役に立ったかどうかを全てもらさず記録してもらった。その後に、訳に関する出来事や、テキストの難易度、制限時間による辞書引きの仕方の変化などについてアンケートによる補足を行った。計22名が情報を提供し、Hatherall自身あまりその情報に関して十分な整理をしていないようだが（彼は結果について具体的なデータはほとんど示していない）、次のような点を指摘している。

- 1) 大部分の生徒は、まず全体をざっと読むということをせず、頭から訳し始めて、途中で内容が難しいとわかると全体を見てみる。
- 2) 上級の生徒の方がよく辞書を引く、
- 3) ほとんどの生徒が、英独の項目ばかり見て、独英は見ない。
- 4) 初級の生徒ほど、逐語訳的な翻訳が目立つ
- 5) 2ヶ国語辞典を用いることで、訳語をそのまま引き写した例が多くなった。

上記の結果のいくつかは当然予想されるものだが、それを実際にあるリサーチを行って検証してみることは意義がある。Hatherallの論文で惜しむらくは、分析の方法および結果が明記されていないことで、論文として必要な情報を読者が十分受けられるように今後の研究は留意せねばなるまい。

日本におけるuser studyの実践があるので最後に触れておく。特にこれは、スキル分析としても有効な資料を提供するものなのでこの欄に挙げてみた。その研究とは、昭和60年（1985）6月に岡山県高等学校教育研究会英語部会研究委員会でまとめられた「調査研究：高校入学時と英語Ⅰの指導」と題する研究報告である。注目すべきは、この中で「英語辞書力診断テスト（I）」なるものを作製、実施していることであり、現在EURALEXでスキル分析のためのテスト制作という計画があるようだが、その先を行くユニークな試みであると言えよう。辞書力について、「辞書を引く基本的運用力」（p.111）と定義し、以下の5分野、13項目をそのテストで測っている：

ア. 検索	a) アルファベット順	①
	b) スピード	②
イ. 類推	a) 品詞弁別	③
	b) 意味の類推	④
ウ. 辞書の約束	a) 発音記号（アクセント）	⑤
事項の把握	(母音・子音)	⑥
	b) 品詞表記	⑦
	c) 語形変化	⑧
	d) 可算・不可算	⑨
	e) 派生語	⑩
	f) 同意語・反意語	⑪
エ. 辞書を読む	a) 語法	⑫
	b) 社会的・文化的背景	⑬
オ. 発展的利用	(オ、に関しては、診断テスト(II)で開発の予定)	

この項目設定については明記されているように「経験上」考えられたものであるが辞書力診断として、これらの項目の妥当性が今後検証される必要がある。報告では、岡山県下の12の高校の一年生1,055名を対象にテストを実施し、その結果として、(1)品詞弁別、日本語を介在させた意味の類推などは得点が低く、英語の例文からの意味の推測の正答率が日本語からのより高いことは、示唆に富む、(2) 辞書を引くスピードは当初の予測より極度におそい、(3) 品詞表記、語形変化、可算・不可算などについては辞書の表記法をよく理解しているようだが、派生語の表記、同意語・反意語についての理解は不十分である、(4) 語法を読む力、社会、文化的背景に関する情報を得るなどは辞書を十分駆使しているとはいえない、などが指摘された。また、第13回全国英語教育学会岡山研究会における能登原昭夫氏による発表では、この「英語辞書力診断テスト(Ⅰ)」の結果と1学期の校内実力テストの結果との相関は0.58 ($n = 209$) であり、Bensonssonらの結果とは違った側面から、辞書力と一般の英語力の相関がかなりあることを示唆し、Bensonssonらの結論を再考させるようなデータを示している。

いずれにせよ、この辞書引きスキルを測るということは未踏の分野であり、大変興味深い。何をもって、「辞書が引ける」とするのか、その要素間の重みづけはどうなのか、どのように妥当性のある信頼度の高いテストを作成できるのか。これらの疑問に答えることは同時に良いuser分析、ニーズ分析へつながっていく重要な課題であると言えよう。

3. 6. The User study : 今后の課題

以上、辞書使用者に関する研究の諸相を概観してきたが、一貫して言えることはuser研究が進むほど実験による経験的データを取る必要性が増す、ということである。辞書学が新しい局面を迎えたというのは、まさにこのuserという千変万化する人間相手にデータを取るという必要性の発生ゆえなのである。現状のthe user studyの課題は、この経験的データを得るためにsystematicなりサーチの計画実行を可能にする人材の発掘にあると言えよう。そのためには、単にlexicographerであるだけではなく、metalexicographerでなければならない、という条件も生ずる。また、辞書を作る側とは別個に、使う側からのfeedbackを供給するためのresearcherが専門的に現われる必要がある。彼は、lexicographerが疎い、心理学研究や統計の手法を熟知していねばならず、userの上記4つの側面（あるいはそれ以上）に関してデータを取り、それをもとにlexicographerに助言ができるようになる。このような関係ができることによって、metalexicographyは科学としてアプローチしていくことが可能となろう。The user studyは、まさしくその鍵を握っていることになるのである。具体的にはニーズ分析とスキル分析がその柱となるであろう。前者の研究が進むことにより、その内容的なものへの影響はdictionary typologyへ、また、userのニーズ別の分析によるuser typologyへと進んでいくだろう。一方、スキル分析は、userの辞書引きプロセスの解明という大きな課題を中心に、good dictionary user vs poor dictionary userの対比は、dictionary typologyへの有益な情報を提供するであろう。もう一つの大きな問題は、Bensonsen et al (1984) などが追及している「辞書は英語（あるいは他のL2）習得（ないし学習）を促進するか？」ということである。辞書の編集や開発はそれ

自体大きな研究テーマたりうるが、*user*の調査研究の視点でどうしてもありがちなのは、辞書製作の側からばかり見てしまうことであり、言い換えると、本当に辞書を引くことが辞書を引かないことよりどのような点で学習者に良い影響を与えるか（あるいは与えないのか）、という根本問題に触れようとしないことである。確かにここまでくるとそれは*metalexicographer*の領域ではないかもしれない。しかし、*user*を無視できない辞書学の現状で、真に*L2 learner*の立場に立った時、この質問は避けられない。日本では、英語辞典は、中2までは使わせない方がいいとも言われている（羽鳥 1982）。また中学では全然使わなかったのが高校になって突然中辞典クラスのものをあてがわれ、教師からは「こんなのも引けないのか」と言われる、という話も聞く。

*L2 learner*に対して意識し始めている最近の辞書学は、このへんの問題に対しても無関心ではいられなくなっているのではないだろうか。

3. おわりに

以上、辞書学の各分野を*the user study*を重点的に取りあげて概説してきた。本論の目的は、我が国ではほとんど知られていない最近の辞書学の動向を伝えることと、今後の辞書学の方向を予測することであった。辞書学全体から眺めると最も中心となるのは、コンピューター利用と*user-oriented*な辞書作りという二点であろう。*The user study*についてはかなり詳しく問題点を指摘したので、別の機会にコンピューター利用の現状についてレポートしたい。筆者は専門は英語教育学であるが、今後の辞書製作にはこの分野からの視点が是非必要であると信じるし、また、単により良い辞書というに届まらず、辞書を通して見る*user*の情報検索のシステムの解明は、辞書以外の多くのレファランス作業に有益な資料を提供するものと確信している。今後ますます学際的な性格を辞書学が持っていくことが望まれ、それが将来の情報化社会で人と情報をどのように結ぶかを解く鍵になることを筆者は期待している。

BIBLIOGRAPHY

- Al-Kasimi, A. M. (1977) *Linguistics and Bilingual Dictionaries*. Leiden : Brill
- (1983) "The interlingual / translation dictionary" in Hartmann ed. (1983)
- Ard J. (1982) "The use of bilingual dictionaries by ESL students while writing" ITL No 58 : 1-27
- Atkins, B. T. (1985) "Monolingual and Bilingual Learners' Dictionaries : a comparison" in Ilson ed. (1985) : 15-24.
- Ayto, J. R. (1983) "On specifying meaning" in Hartmann ed. (1983)
- Bailey, R. W. (1986) "Dictionaries of the next century" in Ilson ed. (1986)
- Bailey, R. W. (ed.) (1987) *Dictionaries of English*. Ann Arbor : University of Michigan Press.
- Barnhart, C. L. (1962) "Problems in Editing Commercial Monolingual Dictionaries" in Householder & Saporta (1962).
- Bejéint, H. (1981) "The foreign student's use of monolingual English dictionaries : a study of language needs and reference skills." *Applied Linguistics* 2, 3.
- Bejéint, H. (1983) "On field-work in lexicography" in Hartmann ed. (1983)
- Benson, M. (1985a) "Collocations and Idioms" in Ilson ed. (1985) : 61-68
- Benson, M. (1985b) "Lexical Combinability" *Papers in Linguistics*, 18, special issue; *Advances in Lexicography*. W. J. Prowley and R. Steiner, eds.
- Benson, M., E. Benson and R. Ilson (1986) *Lexicographic Description of English*. Studies in Language Companion Series (SLCS) No 14. Amsterdam : John Benjamins.
- Bensoussan, M., D. Sim and R. Weiss (1984) "The Effect of Dictionary Usage on EFL Text Performance Compared with Student and Teacher Attitudes and Expectations." *Reading in a Foreign Language* 2 :
- Bujas, Z. (1975) "Testing the Performance of a Bilingual Dictionary on Topical Current Texts" *Studia românica* : 193-204

- Burkett, E. M. (1936, 1979) *American Dictionaries of the English Language Before 1861*. The Scarecrow Press, Inc. N. J.
- Cowie, A. P. (1978) "The place of illustrative material and collocations in the design of a learner's dictionary." in *In Honour of A. S. Hornby*, ed. by P. Strevens (OUP)
- Cowie, A. P. (1981) "The treatment of collocations and idioms in learners' dictionaries." *Applied Linguistics* 2, 3
- Cowie, A. P. (1983a) "On specifying ing grammar" in Hartmanned. (1983)
- Cowie, A. P. (1983b) "The pedagogical / learner's dictionary" in Hartmann ed. (1983).
- Cowie, A. P. (1984) "EFL dictionaries : past achievements and present needs." in Hartmann ed. (1984) : 155—164
- Crystal, D. (1986) "The ideal dictionary, lexicographer and user" in R. Ilson ed. (1986) : 72—81
- Delbridge, A. (1983) "On national variants of the English dictionary" in Hartmann, ed. (1983)
- Dubois, J. (1981) "Models of the dictionary : evolution in dictionary design." *Applied Linguistics* 2, 3
- Engel, G. & B. N. Madsen (1984) "From dictionary to data-base." in Hartmann ed. (1984) : 339—344
- Friend, J. H. (1967) *The Development of American Lexicography 1798—1864*. The Hague : Mouton
- Geererts, D. (1987) "Types of Semantic Information in Dictionaries." in Ilson ed. (1987b). : 1—10
- Gleason, H. A. (1967) "The Relation of Lexicon and Grammar" in Householder & Saporta (1967).
- Gove, P. ed. (1967) *The role of the dictionary*. New York : Bobbs-Merrill Co, Inc.
- Hartmann, R. R. K., ed. (1979) *Dictionaries and Their Users*. UK : Exeter

- Linguistic Studies. Univ of Exeter.
- Hartmann, R. R. K., ed. (1984) *Exeter '83 Proceedings*. Papers from the International Conference on Lexicography at Exeter, 9–12 September 1983. Tübingen : Niemeyer.
- Hartmann, R. R. K. (1986a) "The training and professional development of lexicographers in the UK" in Ilson ed. (1986) : 89–92
- Hartmann, R. R. K., ed. (1986b) *The History of Lexicography. Studies in the History of the Language Sciences* vol. 40. Amsterdam : John Benjamins.
- Hartmann, R. R. K. (1987a) "Dictionaries of English : The User's Perspective" in Bailey ed. (1987) : 121–135
- Hartmann, R. R. K. (1987b) "Four perspectives on dictionary use : a critical review of research methods." in A. P. Cowie ed. (1987) *The Dictionary and the Language Learner. Papers from the BURALEX Seminar at the University of Leeds, 1–3 April 1985*. Tübingen : Niemeyer
- Hatherall, G. (1984) "Studying dictionary use : some findings and proposals." in Hartmann (ed.) (1984) : 183–189.
- Haussmann, F. J. (1986) "The training and professional development of lexicographers in Germany." in Ilson ed. (1986) : 101–110
- Hayashi, T. (1978) *The Theory of English Lexicography*. Amsterdam : John Benjamins.
- Herbst, T. (1984) "Adjective complementation : a valency approach to making EFL dictionaries." *Applied Linguistics* 5, 1
- Herbst, T. (1987) "A proposal for a Valency Dictionary of English" in Ilson ed. (1987b) : 29–48.
- Hornby, A. S. (1954) *A Guide to Patterns and Usage in English*. UK : OUP.
- Householder, F. W. & S. Saporta, eds. (1962) *Problems in Lexicography*. Indiana : Bloomington ; The Hague : Mouton (2nd ed., 1967)
- Ilson, R. ed. (1985) *Dictionaries, Lexicography and Language Learning. ELT Documents* 120 Oxford : Pergamon Press.

- Ilson, R. ed. (1986) *Lexicography: An emerging international profession*. The Fulbright Papers vol. 1 UK : Manchester Univ. Press.
- Ilson, R. (1987a) "Towards a Taxonomy of Dictionary Definitions." in Ilson ed. (1987)
- Ilson, R. ed. (1987b) *A Spectrum of Lexicography. Papers from Aila Brussels 1984* Amsterdam : John Benjamins.
- Iwasaki Linguistic Circle (岩崎研究会) ed. (1981) 「英語辞書の比較と分析」 2vols. 東京 : 研究社
- Jackson, H. (1985) "Grammar in the Dictionary" in Ilson ed. (1985) : 53-60
- Kharma, N. N. (1984) "Contextualization and the bilingual learner's dictionary" in Hartmann ed. (1984) : 199-206
- Kipfer, B. A. (1984) "Methods of ordering senses with entries" in Hartmann, ed. (1984) : 101-108.
- Kirkpatrick, B. (1985) "A Lexicographical Dilemma: monolingual dictionaries for the native speaker and for the learner" in Ilson ed. (1985) : 7-14
- Knowles, F. (1983) "Towards the machine dictionary" in Hartmann ed. (1983) : 181-194
- Knowles, F. (1984) "Dictionaries and computers" in Hartmann ed. (1984) : 301-314
- 小島義郎 (1984) 「英語辞書学入門」 (三省堂選書110)
- Lemmens, M. & H. Wekker (1986) *Grammar in English Learners' Dictionaries* Tubingen : Niemeyer
- Lyne, A. A. (1984) "On rooting out words with inflated frequencies in word-counts of specialized registers" in Hartmann, ed. (1984) : 362-370
- Malkiel, Y. (1959) "Distinctive features in Lexicography: a typological approach to dictionaries exemplified in Spanish," *Romance Philology* 12 ; 366-399
- Mathews, M. M. (1933) *A Survey of English Dictionaries*. New York : Russell & Russell (re-issued, 1966)

- Mathias, J. (1984) "Computer-aided processing of Chinese Lexicographic materials" in Hartmann ed. (1984) : 371-376
- McArthur, T. (1986) *Worlds of Reference*. UK : Cambridge Univ. Press
- McDavid, R. & A. R. Duckert, eds. (1973) *Lexicography in English*. New York : Academy of Science.
- McGregor, C. (1985) "From First Idea to Finished Artefact : the general editor as chief engineer" in Ilson, ed. (1985) : 123-132
- Mitchell, E. (1983) *Search-Do Reading : Difficulties in Using a Dictionary*. Formative Assessment of Reading, Working Paper No 21. Aberdeen : Aberdeen College of Education.
- Moulin, A. (1983) "LSP dictionaries for EFL learners" in Hartmann, ed. (1983) : 144-152.
- Murray, J. A. H. (1900) *The Evolution of English Lexicography*. Oxford, 22 June : the Romanes Lecture.
- Neubauer, F. (1984) "The language of explanation in monolingual dictionaries" in Hartmann, ed (1983) : 117-123
- Neubauer, F. (1987) "How to Define a Defining Vocabulary" in Ilson ed. (1987b) : 49-60
- Oxford Dictionary of Current Idiomatic English* (2vols.) edited by A. P. Cowie, R. Machin & I. R. McCaig. Oxford Univ. Press
- 岡山県高等学校教育研究会英語部会研究委員会（編）（1985）「調査研究：高校入学時と英語Iの指導」
- Osselton, N. E. (1983) "On the history of dictionaries" in Hartmann ed. (1983) : 13-22.
- Quirk, R. (1973) "The Social Impact of Dictionaries in the UK" in McDavid & Duckert, eds. (1973) : 76-88
- Read, A. W. (1986) "The history of lexicography" in Ilson ed. (1986) : 28-50
- Rey, A. (1986) "Training Lexicographers : some problems" in Ilson, ed (1986) : 93-100

- Scholfield, P. J. (1982) "Using the English Dictionary for Comprehension," *TESOL Quarterly* 16 ; 185-194
- Sinclair, J. (1985) "Lexicographic Evidence" in Ilson, ed. (1985) : 81-94
- Sledd, J. & W. R. Ebbitt (1962) *Dictionaries and THAT Dictionary: A Case-book of the Aims of Lexicographers and the Targets of Reviewers* USA : Scott, Foresman.
- Sledd, J. & W. R. Ebbitt & G. J. Kolb (1955) *Dr. Johnson's Dictionary: Essays in the Biography of a Book*. Chicago : Univ. of Chicago Press.
- Starnes, D. & G. Noyes (1946) *The English Dictionary from Cawdrey to Johnson*. Chapel Hill : Univ. of North Carolina Press.
- Strevens, P. ed. (1978) In Honour of A. S. Hornby. Oxford Univ. Press
- Teubert, W. (1984) "Setting up a lexicographical data-base for German" in Hartmann ed. P1984) : 425-429
- Tomaszczyk, J. (1979) "Dictionaries :users and uses." *Glossodidactica* 12 : 103-119
- Tomaszczyk, J. (1983) "Issues and developments in bilingual pedagogical Lexicography" *Applied Linguistics* 2, 3 ; 287-296
- Tomaszczyk, J. (1984) "The culture-bound element in bilingual dictionaries" in Hartmann, ed. (1984) : 289-298
- Tono, Y. (1984) *On the Dictionary User's Reference Skills*. Unpublished B. Ed. dissertation. Tokyo Gakugei University
- Tono, Y. (1985) "A correlational study of dictionary reference skills and reading comprehension" Unpublished paper.
- Tono, Y. (1986) "A scientific approach toward Lexicography" in LEO. Tokyo Gakugei University Graduate School.
- Tono, Y. (1987) *Which Word Do You Look Up First? : a study of dictionary reference skills*. Unpublished M. Ed. dissertation. Tokyo Gakugei University
- Weinbrot, T. D. ed (1972) *New Aspects of Lexicography*. USA : Southern Illinois Univ. Press.
- Wells, J. C. (1985) "English Pronunciation and its Dictionary Representa-

tion" in Ilson ed. (1985) : 45-52

Wiegand, H. E. (1977) "Einige grundlegende semantisch-pragmatische Aspekte von Wörterbucheinträgen. Ein Beitrag zur praktischen Lexicologie" Kopenhagener Beiträge zur germanistischen Linguistik 12: 59-149

Wiegand, H. E. (1984) "On the structure and contents of a general theory of lexicography" in Hartmann, ed. (1984) : 13-30

Wolfart, H. C. (1979) "Diversified access in Lexicography" in Hartmann, ed. (1983) : 143-153

Zgusta, L. (1971) *Manual of Lexicography*. The Hague : Mouton

Zgusta, L. (1984) "Translational equivalence in the bilingual dictionary" in Hartmann, ed. (1984) : 147-154